

## 「最新の咳の話題」

### —慢性咳嗽の病態は基礎的にどこまで解明されるか?—

亀井淳三

星薬科大学薬物治療学教室

慢性咳嗽に対する関心が高まっているにもかかわらず、その咳嗽反射亢進機構が十分に解明されていないのが現状である。気道における咳の刺激情報を受容するものとして TRPV1 (transient receptor potential vanilloid 1) や TRPA1 (ankyrin transmembrane protein 1: ANKTM1) 受容体が注目されている。また、咳受容器の興奮性調節に関与するチャンネルとして電位依存性 Na<sup>+</sup> チャンネルのサブタイプであるテトロドトキシン抵抗性 (TTX-R) Na<sup>+</sup> チャンネルの Nav1.8 などが想定されている。しかし、慢性咳嗽の発症要因は多種多様で複雑であり、種々ある慢性咳嗽の病態下においてこれら受容体、受容体興奮性調節機構さらには受容体に対するメディエーターがどのように変化しているかについてはほとんど解明されていない。

そこで本講演では、アトピー咳嗽、喉頭アレルギー、胃食道逆流症あるいは百日咳などの慢性咳嗽病態におけるこれら受容体あるいはチャンネルを中心とした咳の感受性調節機構の変化に関するこれまでの知見に自身の新たなデータを加えて紹介し、慢性咳嗽の病態は基礎的にどこまで解明されるかについてレビューしたい。